

アジア

AR252

2026年1月～4月号

レポート



**ヒマラヤの国、ブータンで信仰をささやく
日本に派遣された宣教師**

表紙写真：吉田 隆

ヒマラヤの国、ブータンで 信仰をささやく

インド・シリグリのイクイップチャーチ牧師：キコン



小さなヒマラヤ王国ブータン、別名雷龍の国。ブータンではキリスト教は、禁教とされており、キリスト教会の登録は認められていません。ですから、クリスチャンたちは、密かに集い、カギのかかった扉の向こうで賛美歌をささやくように歌うのです。発見されれば、職を失います。市民権を剥奪されます。家族さえも失うことを知りながら、それでもブータンのクリスチャンたちは、賛美を続けます。祈ります。耐え忍んでいるのです。

彼らの物語は敗北ではなく、大胆な希望の物語なのです。ヒマラヤの高地では、古代の伝統が深く根付き、キラット・ダルマ信仰があります。キラット族に伝わる伝統的な宗教で、自然と祖先の精霊を崇めています。

67歳のラル・ブド・ライさんも、ここで先祖代々と同じように生きてきました。すなわち、儀式を忠実に実践し、精霊を敬い、シャーマンの信仰を通じてその意義を求めているのです。

しかし規律正しい生活の表層の下で、心の中では嵐が渦巻いていたのです。運転中に耳元で響く叫び声、だれにも聞こえない助けを求める叫び声が、ラル・ブド・ライさんを苦しめるようになりました。

混乱と恐怖に駆られたライさんは、必死に癒しを求め始めました。知り得る限りのヒンドゥーの神々に祈り、寺院を訪れ、呪術師や僧侶に相談しました。しかし天からの沈黙は耳を激しく攻撃するかのようでした。

ちょうどその時、神様が定めた出会いが訪れました。キリスト教会のラザロ牧師がライさんと出会い、福音を伝えたのです。ライさんは福音を聞くうちに、何かが彼の心を突き刺したのです。イエス様のみ名——今までに聞いたことがない、馴染みのない、しかし平安に満ちたその名は、自覚すらなかった渴望を呼び覚ましました。「イエス様だけが私を救える！」ライさんは、そうささやき、その瞬間にイエス様に身を委ねました。



ハレルヤ！主の御名をほめたたえます。新しい年を迎えて上半期が始まりました。主への期待感があふれておられるでしょうか？それとも目の前で起こる出来事、迫る期限、仕事に追われる日々でしょうか？いずれの所にも主がともにおられることを感謝します。

昨年末、私どもの教会は、カンボジアで子どもたちを養い育てる Miki Home の支援のためにささげる特権にあずかりました。送金手続きがされて、実際に現地で活用されるまでには少し時間がかかると思いますが、支援を受ける方々にとっての励ましとなり、笑顔が起ころうと願っています。実はこの支援金は、元々、ネパールの子どもの家支援のためにささげられたのですが、突然、現地の友人との連絡が取れなくなりました。ネパール国の事情が不安定な上、災害が重なった時期でしたので心配をしています

が、献金をいつまでもとどめておくべきではないと判断し、教会と支援者に報告をしました。そして「これは私たちのための献金ではなく、海外の支援を必要とする子どもたちのための捧げものだから」ということで理解を得ましたので、Miki Home への支援に変更した次第でした。Ⅱコリント 9:12「なぜなら、この奉仕の務めは、聖徒たちの欠乏を満たすだけではなく、神に対する多くの感謝を通してますます豊かになるからです。」私たちが、自分の属する教会の働きを共に支えることは「神の家族、教会」として当然のことなのですが、その枠を超えて、「自分のためではない捧げもの」が、欠乏している誰かを支えることができるとしたら、喜ばしいことではないでしょうか。アジア・アウトリーチ・ジャパンは、そのためにも豊かに用いられてほしい通りよき管なのです。

イエス様を主であり救い主として受け入れ、苦しみがありました。平安が魂を満たしました。喜びの涙を流しながら洗礼を受け、宣言しました。「だれも見つけられなかった私を、イエス様は見つけてくださった」と。

しかしイエス様を信じた代償は大きかったのです。伝統に縛られた家族はライさんに背を向けました。ラル・ブド・ライさんがイエス様を受け入れた瞬間、その代償ははっきりとしました。

家族はライさんの聖書を燃やしました。ライさんを家から、追い出しました。彼はホームレスになりました。今でも子どもたちは聖書を持った彼を見ると、何度も、何度も、聖書を奪い取り、燃やしてしまいました。それでもライさんはひるみませんでした。決して退きません。苦しみにも沈黙させられないイエス様の愛にすがりつきました。

毎朝、ライさんは復讐ではなく人々の救いのために祈ります。家族が救われるように、天に懇願しています。自分の心を癒してくださったイエス様が、同じように家族の心をも癒せる、と信じながら。

「彼らは聖書のページを燃やしただろう！」ライさんは静かに言います。「だが、私の心に刻まれた真理は燃やしません。」

これは単なる回心の物語ではありません。契約の物語なのです。ライさんのイエス様に対する愛は安楽の上に築かれたものではないからです。炎の中で鍛え上げられたものです。それでもなお、ライさんは立ち続け、祈り続けます。それでもなお、信じ続けます。

キコン牧師、ラザロ牧師、そしてシリグリのイクイップ教会ミニストリーを通じて奉仕するチームは未伝の地に伝

道することに生涯を捧げています。揺るぎない信仰をもってです。彼らはイエス様の名が一度も語られたことのない田舎の村々へと旅立ちます。旗を掲げたり大聖堂を建てたりはしません。代わりに、彼らは最も純粋な形で福音を届けます。愛と祈り、そして個人的な証しを通して、希望が長く失われていた場所で人々に触れ、その心を変えて



ラル・ブド・ライさん

いくのです。多くのブータン人クリスチャンは、国境を越えた宣教活動を通じて信仰に導かれました。インドやネパールのクリスチャンたちが文化的・地理的境界を越え、良き知らせを分かち合っているからです。

こうした静かな宣教師たちは、ブータンの村人にとってキリスト教との最初にして唯一の接点となることが多いのです。彼らの証しを通して、小さな信徒の集まりが形成され、成長し、風に乗った種のように国中に広がっています。

こうした交わりは隠れてはいますが、決して無力ではありません。彼らはささやく祈りを捧げ、声を潜めて聖書を分かち合い、夜に香るように立ち上る賛美の歌を歌います。彼らの信仰は建物やプログラムで規定されるものではなく、火の中で鍛えられ、恵みによって支えられ、キリストの希望に根ざしているからです。

この世のものと夢、すべてを主に捧げて

テーム・ラーシナさん

(Fida International/ フィンランド宣教師)



私が日本に来ようと思ったのは、聖書を読んだ後の葛藤がきっかけだったと思います。ヘブル人への手紙第11章に記された信仰の模範と、自分の人生が一致していないことに気づいたのです。そこには「彼らはこの世を異邦人のように感じた」「これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。……はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。」(ヘブル11:13)と書かれていましたが、私は実際にこの世の多くのものを大いに楽しんでいました。私は自分の人生をイエスに完全に委ねていなかったと結論づけました。

そこで2022年の春、主が私にそうするように招いておられると感じたのです。次に何をすべきか考え始め、聖書学校の宣教準備コースに応募し、その後3カ月の宣教訓練を受けました。訓練先の候補地3カ所のうち、私の母教会が既に宣教活動を行っていた日本が選ばれました。2023年夏の訓練期間を終え、2024年夏に長期で日本に戻るよう主が私を召されていると感じました。

そしてBAM「ビジネス・アズ・ミッション」という方法で、日本に来ようと考えました。正直に言うとBAMという概念は私にとって少々難しいプロセスでした。私は日本に来る時、福音が全国に効果的に届く大規模なメディア企業を築くという夢を持っていました。しかし日本での最初の1年で、その夢は主の前に犠牲として捧げられるべきだと気づきました。私の心はまだ自分の賜物や所有物に執着していました。そこで私は、エリヤに従う際にエリシャが自分の牛のつがいを手放したように、メディアの夢を諦めなければならない境地に立たされました。エリシャは牛を屠り、その肉を私たちに分け与えたのです。天の所有物ははるかに豊かで広大であり、私たちは何とかしてそれを

つかまねばなりません。また宣教の現場で聖霊が切実に必要であることも悟りました。ここで学んだ教訓は、主の召しと相反するものが心の中にないかを点検することです。私たちに与えられた使命はただ一つ、すべての国々に福音を宣べ伝えることです。これより重要なものがあってはならないのです。ですから私は今、語学学習を継続し、この2年間のオリエンテーション期間が終わった後に、主が私に何を望まれるか、その御声に耳を傾けることに集中しています。主が奉仕のためにメディアの働きをするための新しいカメラを与えてくださるかもしれないし、あるいは全く異なる計画をお持ちかもしれないのです。

日本でリバイバルを体験したいです。多くの人々の心が神に向き、救いの喜びで満たされるのを目撃したいと思っています！リバイバルはもっぱら聖霊の働きによる結果だと考えます。オズワルド・J・スミス著『魂への情熱』(1950年)の結びでは、我々が理性的な理解に基づいてどれほど働いているかを問いかけています。むしろ「私たちは再び唯一の力の源、神の祝福された聖霊に立ち返らねばならない」。ゆえに私も、神の民がこの国にリバイバルが押し寄せることを待ち望む役割を担っていると信じます。神の働きが民の祈りと神秘的に結びついていることを、私は幾度となく実感してきました。しかし神が祈りを聞いてくださるためには、私たちは罪を告白し悔い改めねばなりません。聖められた手と心をもって祈り、神が再び御霊を注いでくださるように願い求めましょう。「そうして、西の方では主の御名が、日の昇る方では主の栄光が恐れられる。それは、主が激しい流れのように来られ、その中で主の息が吹きまくっているからだ。」(イザヤ書59:19)

編集後記

○バングラデシュのキリスト教会の会堂がなかった村に会堂を建設しておりますが、二つ目の会堂が完成いたしました。3月にアジア・アウトリーチ・ジャパン主事吉田隆が献堂式に行くことになっております。日本とバングラデシュという二つの国のクリスチャンたちが、それぞれの国で、神の国が拡大し、前進するために祈り合っていくことができることを感謝します。三つ目の会堂のための献金が少し不足しておりますが、鍬入れ式をすることができれば幸いであると願っています。

います。

○アジア・アウトリーチ・ジャパンでは、毎月アジアの異なる国の宣教情報を提供させていただきます。1カ月間その国のために祈りいただいております。ウェブサイト (<https://aojapan.org>) からご覧いただけますが、毎月の配信をご希望の方は、aojapan@zeus.eonet.ne.jp までお申し込みください。

迫害されている
クリスチャンの
ために祈ろう！
hakugai.org